

農業革新支援専門員プロジェクト活動 令和7年度取組 総合評価表

課題 NO.1 課題名 環境に配慮したさつまいも栽培体系の構築

(「園芸振興」、「みどりの食料システム戦略」関連課題)

計画期間 令和7年度～令和8年度

担当チーム員 ◎高橋、大河原、菊地、田村 記述者：高橋

対象名及び対象数 各農業改良普及センター令和7年度普及指導計画の対象者

〔(有)ライスアーティスト、(農)おおぬき彩土里ファーム、(農)エコルファーム 3経営体〕

(1) 活動指標：普及活動の進捗状況等（月次活動計画の進捗度）

①担当班及び進行管理責任担当者 農業革新支援専門員チーム 農業普及指導担当課長

②合計総現地活動日数 (42日／内計画日数43日)

③活動指標ごとの活動日数

- ・環境に配慮した栽培技術導入支援 (28日／内計画日数30日)
- ・収穫作業の省力化支援及び収益性評価 (9日／内計画日数9日)
- ・県内生産者へ向けた情報提供 (5日／内計画日数4日)

(2) 成果指標

<設定した目標>

- ①環境に配慮した栽培への理解が深まる
- ②収穫作業の省力化により適期収穫が図られ収量が向上する

<設定した目標に対する所見及び課題>

- ①環境に配慮した栽培への理解が深まる

グリーンな栽培体系加速化事業を活用し、普及センターや資材メーカーの協力を得ながら、対象者のさつまいも栽培における生分解性マルチ現地実証を支援した。

作付け前の段階より、普及センターによる土壌分析や施肥量を示した施肥設計の支援により、各ほ場ごと、窒素施用量の上限を意識した適切な施肥が行われ、その結果、土壌への肥料成分の過剰投入や「つるぼけ（地上部の過繁茂）」の発生を回避することができた。

実証開始前の5月上旬に美里地区で生分解性マルチ実演会を開催し、過剰に圧力を掛けると縦に裂けやすい性質等を確認した後、県内3地区で実証ほが設置され、対象者が資材の特徴や取扱いの注意点を理解した上で現地実証が開始された。

6月上旬から収穫直前の9月下旬までの間、各普及センターが定期調査を支援し、マルチの分解程度や地上部の生育、雑草の発生を観察した。その結果、種類により分解の開始時期が異なること、いずれの種類においても茎葉が繁茂した後に分解が開始するため、ほぼ期待どおり

に雑草の発生は抑制されること等を確認し、生産者と共有した。

1月下旬に大崎地区で開催した実績検討会では、各地区での調査結果を共有し、実証に取り組んだ対象者からは長所や短所等の所感、資材メーカーからは先進地における活用上の工夫等、活発な情報交換が行われ、今後の実証でより効果的な活用方法を確認し、栽培体系に取り込もうとする気運を感じ取ることができた。

一連の活動により、実証に取り組んだ対象者の環境に配慮した栽培に対する理解と関心が大きく向上した。

②収穫作業の省力化により適期収穫が図られ収量が向上する

8月下旬に石巻地区で開催した現地検討会では、対象者が収穫時に使用する機械類を確認しつつ、生分解性マルチを使用したほ場の収穫作業の動画を視聴することで、対象者は作業イメージを把握した上で収穫期を迎えることができた。

各実証地区で収穫の作業時間を調査したところ、生分解性マルチを用いた場合に、ポリマルチと比べて約1割から2割の作業時間の削減効果が確認された。また、3つの実証地区のうち2地区は10月末までに収穫作業を終了させることができ、気温低下による収穫ロスが発生が回避され、1地区では昨年よりも収量が向上した。

一方で、生分解性マルチは栽培期間中に分解が始まることから、収穫前の降雨で土壌が湿潤な状態になりやすく、収穫時にイモに泥が付着することで収穫調製の作業性が低下する等の課題も確認された。

	設定した目標	結 果
②定量的数値目標	県内のさつまいも栽培での生分解性マルチの導入地域数：4地域	県内のさつまいも栽培での生分解性マルチの導入地域数：4地域

（３）対象から意見及び評価

少人数で一定規模のさつまいも栽培に取り組む私達にとって、生分解性マルチは必要不可欠な資材と考えている。来年度も現地実証に取り組み、栽培体系の中に取り入れていきたい。

（有限会社ライスアーティスト 代表）

（４）関係機関からの意見

生産現場では作業の省力化は必須であり、生分解性マルチはニーズを満たす資材だと考える。効率的な生産の実現に向け、引き続き協力して取り組んでいきたい。

（資材メーカー 担当者）